My sword,Your sheath

桐生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍｙ　ｓｗｏｒｄ，Ｙｏｕｒ　ｓｈｅａｔｈ

【Ｎコード】
Ｎ３１７９Ｚ

【作者名】
桐生

【あらすじ】
私立龍王学園。神上市にあるこの学園に在籍する学生、光永　空は、友人たちと共に平和な学園生活を過ごしていた。
そんなある日、海外から帰国してくるはずがアクシデントにより入学式から少し遅れて学校に通うことになった一人の少女との出会いが、彼の波乱怒涛の人生への幕開けになった。

開幕は断罪と共に

腹部から感じる圧迫感を意識から外し、首を窓の外へ向ける。
まだ一年の半分も経過していないというのに、夏になんの引けもとらない陽射しがグラウンドを照りつける。
遠近感なんて考えるのも無駄だろうと思わせる雲一つない青空。
今日は四月二十四日月曜日。
俺が偏差値はまぁ、そこそこの高校、私立龍王学園の高等部に入学してから早くも二週間が過ぎた。
といっても中等部からのエスカレーターなので、高校受験は体験していない。
ゴールデンウィークという大型連休まで残り一週間程だが、この汗が吹き上がるような炎天下では連休は自宅という避暑地で過ごしたい。
最後尾の窓際というポジションにいる俺から見えるグラウンドでは、袖や胸の校章が青い体育着のいかにも『俺ってスポーツ出来るぜ、イェーイ』みたいなオーラを出している男子たちが汗を散らしながら縦７０ｍ×横５０ｍ程のコートでボールを奪い合う。
逆に『スポーツなんてできねぇよ、ボケ』と若干面倒くさそうにしているように見える男子たちはコート内で邪魔にならない程度に固まり、会話に花開かせている。
女子は体育館にいるらしくグラウンドにはいない。

グラウンドを眺めたあと俺はその奥にある桜の木に視線をずらす。
まだ緑色へと衣替えをしていない木々は、今春の暑さで項垂れているようだがまだ春を感じさせる桜色。
その奥には、フェンス越しに町が一望出来る。
神上市。
それがこの学校のある、俺が住んでいる町の名前だ。

俺が小学５年生の頃、町の合併があり、その際に新しい市の名前の募集をとった結果この名前に決まったらしい。
当時の同級生たちとアンケート用紙に『三国市』等という、今考えれば下らなすぎることを書きこんで提出したのでよく覚えている。
その後に教師に呼び出され説教、拳骨、廊下の拭き掃除の３連コンボをされたので余計に。
ビル群が無数に建ち並び、バックに自然いっぱいのでっかい山が聳え立っている光景は、自然と不自然が調和しないことを明確に表している気がしないでもない。

そして視線を教室内に戻す。
『彼氏が出来たんですよー』などと昨日のＨＲで突然暴露して、生徒たちから若干の非難の目を受けていた童顔気味の担任は既に来ていて、黒板の前に立ち、驚愕の視線で俺を見ている。
俺と同じ制服に身を包んでいる同級生たちも同様の視線を俺にぶつけている。
簡潔に言うのならば、今の俺はクラスの視線を一点に集めているのである。
教室内は静まり返っていて、誰も彼もが無言、無音、無動。
ただ黒板の横に掛けてある時計の針が時間を刻む音だけが教室に響いている。

その静寂を破ったのは教室内に居る誰でもなく、扉のノックの音だった。
「すいません、二年一組の黒乃です。中村先生、少しお話があるのですがよろしいでしょうか？」
扉越しの女の声が教室内に響き渡る。
高すぎず、低すぎず、凛とした、耳に気持ちよく残る美声と呼べるであろう特徴的な声。
その声を耳にした瞬間、俺の全身が総毛立った。

「え、ええ……どうぞ……」
その声に名前を呼ばれたこのクラスの担任、中村先生はおどおどしながら肯定の声を返す。
ガラガラ、と教室内で二つあるうちの前方の扉の開く音がする。
一人の女子生徒が、足音を響かせながら教室内の静寂を切り裂いて入ってきた。
腰まで届く赤みがかった清楚な黒髪、憂いを秘めた紅色の瞳。
背は女子の中では高めだが、均整の取れたプロポーション。
町を歩いたら道行く人全てが目を奪われるであろう、絶世の美女と称せる女性。
支持率９９，９％という異常ともいえる数字で当選した学業優秀、品行方正のこの学園の生徒会長、龍王学園高等部、二年一組、名前を――黒乃（くろの）　真央（まお）。
「失礼します。　中村先生、先日提出した数学の課題のノートなのですが、私の物だけ返却されていないことに何か心当たりはありますか？」
「え？　あ！！　すいません！！　他の生徒の丸付けの参考にしていたのですっかり忘れてました！！」
その言葉を聞いて慌てたように教室前方の黒板の此方から見て左側にある小さな三段の棚を中村先生は漁り始めた。
その様子を見て、黒乃　真央は苦笑している。

そこでふと、言葉が止まった。
自身と俺の方に顔を動かしていた最前列の生徒に気付き、一度首を傾げ、ゆっくりと視線をこちらへ向ける。
その瞬間に、口端に浮かんでいた笑みが消えた。
目を見開き、視線に困惑の色を表す。
そしてほんの少しの間だけ俯き、顔を上げた。
そこに浮かんでいるのは悲哀の色。
常時の凛とした壮麗さが淡い悲しみに彩られた、泣きそうな顔。

冷や汗が背中をなぞる。
心臓の鼓動が加速する。
脈打つそれが体内を揺らす。
瞳が涙で滲んでいる彼女と視線が交差する。
その表情と瞳に胸が詰まり、言葉が、声が出せなくなる。
再びの沈黙が場を支配する。
「あ！！　ありました！！」
上擦った声が沈黙を掻き消す。
彼女の変貌に気付いていない中村先生は、棚へ身体を向けながら声をあげた。
彼女は俺から視線を外し、先程の表情を隠すように力無く微笑みを浮かべて、ノートを受け取る。
そして蚊の鳴くような小さな声で礼の言葉を残し教室を後にした。
それを見届けた教室中の視線が非難へと変化し、俺を貫く。
最後列の、俺とは反対の扉側の席に座している親友に視線を向け、目で『どうすればいい』とアイコンタクトを送る。
コンマ数秒で返答が来た。
『む・り・だ』と口パクでそう告げられ、視線を逸らされた。
親友に裏切られたことに絶望を覚えながら、俺は今まで逸らしていた目の前に視線を落とす。
眼下に広がるのは先程の彼女とは正反対の白い髪の少女が、俺に泣きながら抱き付いているという摩訶不思議な光景。

誰か教えてくれ、俺は一体どうすればいい。

「っ……、ぐすっ……」
「……なぁ、沙耶。そろそろ放してくれないか」
「いやだよ……。次にまた会えたら……二度と離さないって……約束してくれたもん……」
感じる視線に殺気が混じり始める。

担任の先生はその光景を見てあたふたしている。
「……そんな約束をした覚えがないんだが」
その言葉を聞き、俺の胸に顔を埋めていた沙耶が顔を上げ、蒼い瞳を赤く充血させながら上目遣いで俺を見上げる。
「……約束したもん」
切なさそうな瞳で、掠れた声でそう言い、俺を抱く力が強まり、
――その瞬間俺は沙耶を抱き抱え、全力でその場を離脱する。
「――――え？」
「喋るな！！　舌噛むぞ！！」
呆気にとられた沙耶の声と、その直後に聞こえる風切り音。
「――――ふむ、外しましたか。相も変わらず、勘だけは良いですね」
体操着姿の悪魔が俺の先程までいた場所に降り立った。
体操着の袖と校章の色は青。
それは二年生を表す色。
髪形はシャギーを入れたベリーショートの黒い髪。
透き通るような白い肌、体つきは細く体操服にも関わらずへいた

――――――――

「今の愚考を噛み締めながら死になさい」
「心を読んだ！？」
光を写さない無機質の漆黒の瞳で俺を睨み、大きく踏み込んで右手に持っているテニスラケットを両手に持ち直し、大上段に振りかぶる。
沙耶を下ろして背後に押しやり、俺は両手を眼前で打ち合わせ、ラケットを挟み取る。
振り下ろされたラケットが、俺の鼻先数センチの所で停止する。
「いつもいつも気配なく現れて襲ってきやがって！！　忍者かあんたは！！」
「忍者？　いいえ――――――――」

ラケットから手を放し、バックステップで距離を取ると同時に俺の机の上にあったシャーペンを取り、右手の指の間に挟み込む。
「――――――ただの副会長ですよ」
クルン、とその場で一回転し、腕を弓のようにしならせ、三本のシャーペンを投擲した。
「ちぃっ！？」
放たれた三本のシャーペンを、ラケットの柄を握り、舌打ちと共に打ち落とす。
「ただの副会長はこんなことしねぇよ！！」
はっ、と俺の叫びを一笑し、漆黒の双眸に憤怒の炎を灯らせ俺を睨んでくる。
常人を凌駕する身体能力と、暗殺者染みた気配遮断能力を併せ持つこの学園の生徒会副会長、龍王学園高等部二年三組、名を玄夜（くろや）霧音（きりね）。
この女に襲われたた回数は両の指をゆうに超える。
「あんた俺を本気で殺す気か！？」
「……以前に言ったはずですよ。お嬢様を泣かせるようなことがあれば、その時は、必ず私が、貴方を殺す、と」
怒気を露にして叩き付けられたその言葉が、俺の胸に突き刺さる。
ついさっきの黒乃　真央の悲痛の表情が、彼女の去り際の泣き顔が脳裏にフラッシュバックする。
「――――――それ、は」
「それは、何ですか？　彼女を泣かせた貴方に、何かを言う資格などありはしないというのに」
「っ！！」
意識が逸れる。
そして目の前の女は、そんな隙を逃す女ではない。
「ぐっ！？」
腹部に衝撃。
ただ一歩で肉薄してきた玄夜　霧音の蹴りが、俺の腹部に抉り込

む。
完全な不意打ちに、何の備えもしていなかった俺の体が折れ曲がる。
そして追撃。
霞むような速度で拳が顎をかち上げる。
脳が揺れる。
視界が回る。
意識が飛ぶ。
軽い脳震盪を起こされた身体は、意思とは無関係に床に膝をつき、無様に頭を垂れる。
誰かの叫び声が聞こえたが、混濁した意識では誰の声なのかわからない。
頭部に激痛が走り、身体が床に叩きつけられる。
視野が明滅する。
意識はほとんど朦朧としていて、すぐにでも途絶えそうだ。
視界が暗闇に染まる直前の刹那、俺が思い出したのは。
「――――――ぁ」
恥ずかしそうに顔を朱色に上気させ、涙目で、でも満面の笑みで俺を見つめる彼女の姿だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3179z/

My sword,Your sheath

2011年12月11日13時49分発行